

がん哲学外来レポート

メデイカルカフェスタッフ体験記

がん体験者が本音で語り合い、自らの生き方を考える場「がん哲学外来・メデイカルカフェ」が全国に広がっている。カフェを運営するスタッフ（全員ボランティア）の体験をお聞きする。



共感があれば カフェは開ける

岸尾 光 きしお ひかる
新座志木がん哲学外来・カフェ主催者
新座志木バプテスト教会牧師

こうしてお茶の水メデイカル・カフェと、近隣で開かれている新渡戸稲造記念がん哲学学校 in 志木に参加しながら、カフェ開催のための学びを重ねましたが、医療従事者でもなければ、サバイバーでも患者家族でもない私が開催しているものかとのためら

からお茶の水メデイカル・カフェに参加するようにになりました。そしてがん哲学外来の提唱者である樋野興夫先生から、タイムリーな「がん哲学」の講演をお聞きしました。お話を聞いたときに自らの生き方が問われ、心が揺さぶられ、心を新たに帰路につくことが続きました。司会の榊原寛先生もユーモアと温かさに満ちたお話をされ、牧師ならではの参加者への気遣いを拝見するたびに慰められたものです。

ある日、樋野先生に遺族である妻について話したところ、「奥さんと話をしてあげるよ。今から奥さんと呼んだらいいじゃないか」と、「偉大なるお節介」により手を差し伸べてくださいました。さっそく妻に電話をして呼び寄せ、個人面談が始まりました。その中で樋野先生から、「がん哲学外来・メデイカルカフェをやったらいいじゃない」とのお勧めの言葉をいただき、「即効性と英断」によりカフェ開催を決断したのでした。

メデイカルカフェ開催を志して

2011年3月、妻の母ががんで、半年間の闘病生活を経て他界しました。翌年5月、東京のお茶の水クリスチャン・センターで開かれたメデイカルカフェの開設記念講演会に妻が参加し、がん哲学外来メデイカ

ルカフェに強い関心を持ちました。

実は、妻だけでなく私も親族や知人の中にごん患者が多かったことから、2人とも何か助けになりたいと思ったのです。そこで、2013年秋ごろから、教会でがん哲学外来・メデイカルカフェの開催を考えるようになり、私はその年のクリスマス

いなくなりませんでした。果たして、がん患者さんに関わるという厳粛な責任を担えるだろうか、と。

しかしある日のカフェでの対話でこんな体験をしました。私は開拓伝道を10年以上してきましたが「教会に通い始めた人がいても、来なくなってしまう」「何をしても人が増えない」など、自分の力ではどうしようもない課題にたくさん直面してきました。その悩みをテーブルで分かち合ったところ、同席していたサバイバーや遺族の方々が共感してくださったのです。

この経験でわかったことは、自分の力ではどうにもならないことに悩み取り組み、人として誠実に生きようとしているなら、がん患者を始めカフェの参加者との共感が生まれるということ、そしてその姿勢を忘れないければカフェを開催できるということでした。また、樋野先生の「いらぬことをしゃべるよりは、チャウチャウ犬のように黙って人の話を聞いている方がいい」との言葉も支えになりました。

毎回、祈りに支えられて

こうして2014年4月にカフェを始め、私が牧師をつとめる新座志木バプテスト教

会や公民館を会場に、毎月1回開いています。スタッフやサバイバーとしての経験を生かして参加者に寄り添ってくださる方々、他のカフェからの協力者も与えられ、樋野先生にも「さりげなく」気にかけていただいております、感謝です。

カフェでは対話の時間に加えて、樋野先生の著作を読み、「言葉の処方箋」を受け取る時間も持っています。時には県内を始め他のカフェと一緒にイベントを企画して助け合っています。通常は5〜10人前後の集会で、一つのテーブルだけの開催もあります。それでも、毎月行うことに意義があると思っています。というのは、さまざまな事情で来られないとしても、ここでカフェが毎月開かれていて、都合がつけばいつでも参加できるということがみなさんの心の支えだからです。たとえ小さな集まりでも、カフェを楽しみにして来てくださる方がいらっしやいます。唯一無二の存在であることに使命感を覚えて、これからも心を尽くして続けていきたいと思っています。

毎回のカフェが近づくと、「参加者ががっかりしてしまわないだろうか」と気がかりになりますが、文字どおりひざまずいて祈って、神さまにお委ねします。そう

すると人数の多少にかかわらず、必ず実りある時を過ごすことができるのは不思議なことです。来るたびに明るくなっていく方、来たときと風貌が変わって帰る方を見ると、「今日も開催できてよかった。無事守られた」とほっとします。

写真は、2014年10月に、がんサバイバーのアメリカ人牧師、ゲイリー・ハリソン師をゲストに招いたときのものです。持っているのは同師に与えられた「偉大なるお節介症候群認定証」です。

がん哲学外来の生みの親 樋野興夫の「言葉の処方箋」

ひの おきお / 順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授
一般社団法人がん哲学外来理事長



共感をもって寄り添う

新渡戸稲造は札幌農学校の教授時代に貧しい家庭の子どものために「遠友夜学校」を開設しました。その基本姿勢が、「生活環境や言葉が違って心を通えば友達であり、心の通じ合う人と出会うことが人間の一番の楽しみである」でした。このことはカフェにも通じます。あなたの身近に苦しむ人がいたら、余計な言葉をかけることよりもまず、共感の心をもって寄り添ってみてはいかがでしょうか。岸尾さんの姿勢にその言葉を思い出しました。